



偉大な画家と有馬家との関係とは？

京隈武家屋敷と坂本繁二郎生家

久

留米城の南西部に置かれた京隈武家屋敷は、1621年に有馬氏の久留米入城とともに造成され、2年後には完成した上・中級武士の屋敷地で、幕末には約140軒もの武家屋敷が立ち並んでいました。

その中で唯一現在も武家屋敷の母屋建物が保存された坂本繁二郎生家は、近代洋画の巨匠坂本繁二郎の生家というだけでなく、江戸・明治に生きた歴代の家人に関わる資料が豊富に残されていて、久留米藩の武士の生活を垣間見ることができます。



明治42年 坂本生家裏庭から

1 久留米城西側の守り

16世紀の初めの永正年間頃に地元土豪が築城したとされる久留米城。戦国時代には筑後を治める大友方と、肥前から筑後をうかがう竜造寺家との攻防の最前線でした。

中でも、高良山座主をめぐり龍造寺方に付いた弟麟圭が拠る久留米城を大友方の兄良寛が攻撃した籠城戦は、3年にも及ぶ壮絶なものでした。

その後、田中家が筑後一国を領していた時代には柳川城の支城の一つであった久留米城を治世の場とした有馬豊氏は、肥前への備えとして久留米城のすぐ西側にあった洗切の民家を瀬下に移し、藩水軍の基地としています。

また、長門石方面からの進撃に対処すべく梅林寺や法泉寺、日輪寺を配置。豆津渡しから瀬下町を通る道路には、進撃を遅らせる鍵の手状の曲がり多数設けた上に、円乗寺・正蓮寺・西岸寺の3つの寺院を配置。

シリーズ第3回参照



天保時代久留米城下町絵図 (久留米城～京隈部分)



城下町東部の寺町と同様に、危急の際には砦として活用できる西の寺町というべき街造りを行っています。これらの防備を固めた上で、さらに武家屋敷を置きました。それが京隈侍屋敷です。

2 立ち並ぶ武家屋敷

京隈侍屋敷は、現在の明善高校正門付近にあった京隈口門から梅林寺を結ぶ東西道路と、それに交差する5筋の南北道路に沿って侍屋敷が並び京隈小路、後に屋敷地を南へ拡張して新設された小松原小路からなる武家屋敷地です。

ここには1軒が概ね約1650㎡(500坪)もの広さを持つ上・中級藩士の屋敷が並んでいました。その建設は、1621年、経隈村の村人を移転させて始まり、2年後には、120軒余りもの武家屋敷が並び京隈小路が整備されました。

その後、1674年には、現京町小学校付近の谷筋を埋め立てて、小松原小路と呼ばれる11軒の侍屋敷を建設。さらに1676年にも、水害を受ける久留米城外郭の柳原小路(現久留米大学医学部付近)の重臣の屋敷5軒を小松原に移し、完成しました。

画家の坂本繁二郎は武士の末裔だった！坂本家と有馬家の関係や、武家屋敷として唯一残る生家のモノ語りに注目です！



小松原小路にある日本洋画界の巨匠、坂本繁二郎の生家は約450坪の敷地に武家屋敷の母屋が残り、篠山小学校に移築された旧三島家長屋門（元外郭の梶村家の門）と共に久留米城下町に現存する貴重な武家屋敷遺構です。（共に市文化財）



安政2年（1855）改 京隈図

東西道路と直交する南北道路にそって侍屋敷が規則的に並ぶ京隈小路と、企画性のない屋敷配置の小松原小路〔現在の京町6・7丁目〕。居住者は禄高1000石の丹羽家をはじめとして、約9割が禄高100石以上の武士であることがわかる。梅林寺と1650年に移設した水天宮の間には調練場もある。

また、与八郎の時代は幕末の動乱期でもありました。与八郎も当然関心は高かったようで、井伊直弼らの動向を伝える風説書、ペリーやロシア軍艦の来航を伝える瓦版や絵、開国後江戸へ初上陸したロシア使節や軍人を描いた手紙を残し、自らも京都に出張して蛤御門の変直後の京都の治安維持にあたり、その後、第2次長州征伐に従軍し小倉へ出陣しています。

なお、弟団作・八郎の2名は、分家で久留米つつじの栽培に初めて成功した坂本元蔵の養子となり、跡を継いでいます。

8代 金三郎

繁二郎の父、八代金三郎は、若くして各武術を修め、18歳で与八郎と共に小倉口へ出陣。翌年小姓として出仕すると、すぐに山田正之助と共に

シリーズ第1回参照

3 久留米藩士坂本家

坂本家は、田中吉政の重臣でしたが、田中家の廃絶後、有馬家に初代半兵衛が御馬廻組150石で召し出され、以後10代繁二郎が東京に移り、この屋敷を手放す1909年まで坂本生家で代々暮らしていました。歴代の当主が組頭や奉行を勤めて藩に仕えた坂本家には幕末〜明治時代の資料が多数残され、久留米藩士の暮らしを伝える貴重な資料となっています。



6代 孫右衛門

繁二郎の曾祖父、6代孫右衛門は武術肝煎役や御普請奉行を勤めて9〜11代の3代の殿様に近侍し、提出した引退願いを何度も却下され80歳でようやく許されるほどのお気に入りのお家臣でした。

シリーズ第4回参照

7代 与八郎

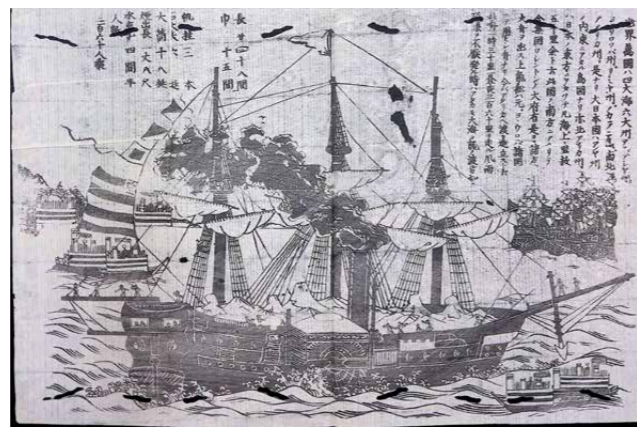
繁二郎の祖父、七代与八郎も殿様に近侍して江戸屋敷勤番が長く、その間10代・11代藩主夫人の御殿普請を勤めて、三つ葉葵紋入の服を拝領しています。



坂本家陣旗
坂本家道具文の菱丸文が染め抜かれている。



坂本家火事装束

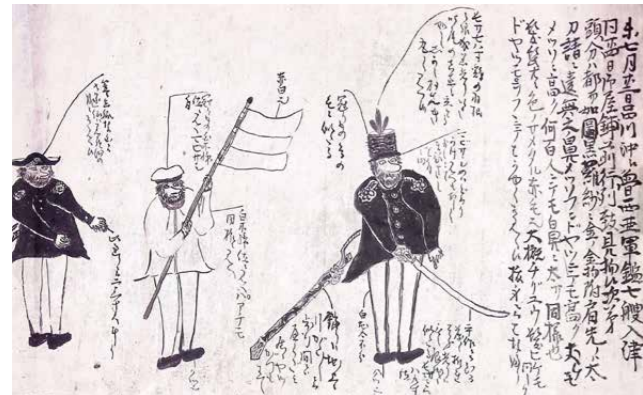


大坂湾のディアナ号
日本がアメリカへ開国したことを知ったロシアも通商を求めて軍艦を大坂湾に派遣。京都近くでの黒船出現に大騒ぎとなった。

に藩命で幕府海軍奉行、勝麟太郎（海舟）が主宰する海軍所への入門を命じられ、西洋の造船術を学びます。ところが、久留米では政変が起き開明派が粛清される事態となりました。



金三郎の武術免許



与八郎安政5年8月手紙 冒頭部



金三郎が描いた坂本家の甲絵

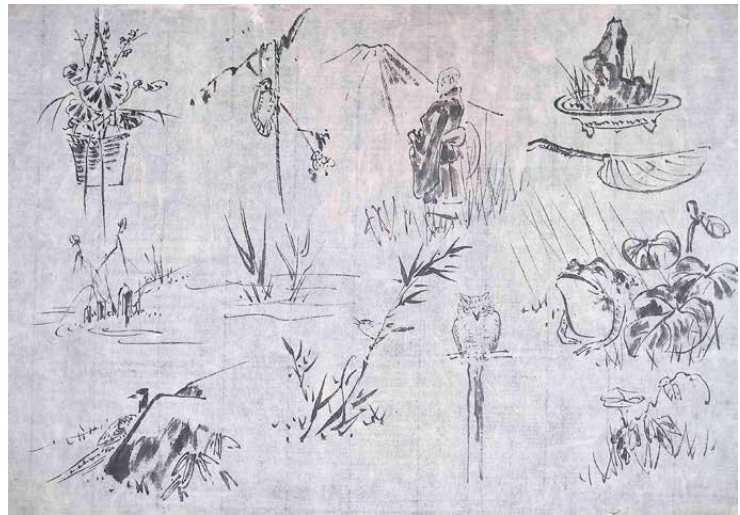


麟太郎の描いた彩色貴族図

この明治維新直後の混乱に金三郎も巻き込まれ、戊辰戦争に従軍した藩兵を迎えるため藩船千歳丸に乗船して京都へ向かった後は活躍の場を失い、押し絵人形の下絵などを描いて生活していたようです。1886年、38歳で亡くなりました。

9代 麟太郎

勝海舟にあやかり名付けられた兄、9代麟太郎は、鉾山技師となるべく旧制第3高等学校（現京都大学）に進学しますが、卒業を目前とした22歳で病気のため亡くなります。



麟太郎の描いた富士と旅僧・梟・蛙絵

10代 繁二郎

18歳で戸主となった繁二郎は、図画の代用教員を勤めて家計を支えます。この時、生徒の石橋正二郎と出会ったことにより、後に石橋美術館が創設されることとなります。

武具や絵だけでなく、坂本家には、琴・琵琶・三味線・一弦琴・尺八・笛・鼓などの多様な楽器も残り、武士の教養の高さが偲べれます。



令和3年4月1日

◆発行／久留米市教育委員会

◆問合せ／久留米市市民文化部文化財保護課

TEL：0942（30）9322

FAX：0942（30）9714

E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp